

うか、佐久東部山地の河川のカワノリの分布について紹介しておきたい。

日本におけるカワノリ（藻類）の分布は、太平洋に注ぐ河川の上流に分布するが、例外として日本海に注ぐ信濃川の支流千曲川水系の抜井川（佐久町）と相木川（北相木村、すでに絶滅）に分布する。これについては諸説があるが、白倉盛男は「日本海成立以前に分布したことで、日本海流出河川の上流には生息しない。第4紀以降の海陸分布と気候の寒暖水河遺存種か、など、また日本海流出河川のうち千曲川上流にのみ分布するものとすれば、第4紀地殻変動と水系水流分布、すなわち、古千曲川が古東京湾に注いだ証左とも考えられる。」と述べている。

〔植物ニュース〕115. サンプクリンドウ
Comastoma pulmonarium Toyokuni ssp.
sectum Toyokuni

本種は南アルプスに産する極めて稀な植物であるとされていた。1922年に小泉秀雄氏が荒川岳で発見されているが、久保田秀夫氏の三伏峠の採品がタイプで、そこからこの名がでている。南アルプスの長野県側では三伏峠と荒川岳、山梨県側の北岳、静岡県側の東岳に分布するとされている（杉本目録）。

ところが1987年8月20日、元島清人氏とハケ岳に登ったところ、ちょうど花をつけた本種が多数あることを確認した。ハケ岳では今のところ、この一ヶ所だけの確認であるが、今までどうして誰も確認できなかったのか不思議である。南アルプス特産であったものがハケ岳にも分布しているということで興味ある問題である。（今井建樹）

116. キバナノマツバニンジン *Linum virginicum* L.

茅野市米沢のゴルフ場造成地に群生している。数年前に確認したが現在も繁殖を続けている。ゴルフ場造成のため芝生を植えたことから侵入したと考えられる。本種は長田武正氏の「帰化植物図鑑」によると北米原産で、久内清孝は「本品はかなり前から千葉県三里塚付近一帯に産し、すでにキバナノマツバニンジン（奥山氏）なる名称が科学博物館の標本に与えられている……」。現在も千葉県下には多く、本州に広く広がっている。L. medium (Planch.) Britt. に当る疑いもあるがまだよくわからないという。本県での帰化を聞いていないので報告する。

（今井建樹）

関東地域から佐久に入ってきたと思われるこれらの種の、佐久での分布の現状とその由来を考える時、「日本海成立以前、古千曲川が古東京湾に注いでいた」地形と植物分布との関連の上に立って考えてみることはできないだろうか。

参考文献

群馬県（1987）群馬県植物誌
植松春雄（1981）山梨の植物誌
諏訪教育会（1981）諏訪の自然誌 植物編
横内 斎（1983）信濃植物誌
長野県植物研究会（1984）長野県植物誌チェックリスト

〔新刊紹介〕池上義信（監修）石沢進（編集）「新潟県植物分布図集 第8集」A4判498頁、口絵写真22葉、合本カード式、限定500部、〒別6,000円、植物同好じねんじょ会、1987年12月。

本号には、No.651 タカネヒカゲノカズラからNo.750 アケボノシュスランまでの100種の分布図等が収められている。またビロードシダ、ホソバイヌワラビ、ヤマコウバシ、フユイチゴ、グンバイヒルガオ等の雑録が掲載してある。

特に「佐渡にあって、越後のフォッサ・マグナ地溝帯に分布を欠く植物」は興味深い。新潟県における分布の欠如は姫川以東の苗場山と柏崎を結ぶ南北線に及ぶ範囲で、フォッサ・マグナ地溝帯とほぼ一致するという。ソヨゴ（南方系）、エゾイタヤ（北方系）、ホナガクマヤナギ（日本海要素）、ヒロハヘビノボラズ、イワシモツケ、ツゲ、ホタルサイコ、ユキクラヌカボの8種である。またコウヤコケシノブ、ウチワゴケ、アオホラゴケの着生シダやウラゲトチノキもこれに準じると言う。その原因としてこの地域が、地すべり多発地域であるからと説明している。

新潟県の南に隣接し、同じフォッサ・マグナ地域の一部をなす長野県での分布の解明が待たれる。郡市誌や町村誌等でフロラ作成は、それぞれの種の存在は記載されるが、その逆の欠如の記録はないのが普通である。このような地道なデーターと提言は、植物の分布に興味を湧かせるのみでなく、その原因究明へのアプローチに欠かせぬキー探しもまた楽しみではある。（山猿）